

# 個性：性転換

八神っち

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

性転換とその際にメリットを付与できる個性を持つ少年のお話。

目  
次

こんな個性があつたら便利そう

体力測定らしいっすよ

戦闘訓練ですってよ奥さん

林間合宿ですよ

突撃隣の浴場ですってよ

17 15 10 5 1

こんな個性があつたら便利そう

人類の8割がうんぬんかんぬんでヒーローという職業が脚光を浴びて いる現代社会。

そのヒーローを多く輩出する名門である「雄英高校」の実技試験の試験会場。

「仮想ヴィランとやらを倒せばいいのか」

1人の普通の体格の少年がルールの再確認をして いた。開始の合図を待ちながら自身の個性の発動の準備をする。

「よしつ！ やるか」

自身の手をパン！ と合わせる。それが彼にとつての個性発動の合図である。

音が鳴る方を他の参加者が見るとそこには少年ではなく。「動きに問題はないね」

髪の毛の色は同じ茶色であるが明らかに容姿が違う少女が居た。少しだけブカついた運動着に現れる小さいとは言えない乳房。腰まである長く少しふわっとしたカールが掛かった髪に整った顔立ち。目の色は黒色から青色に変化している。

あまりの変化に前から少年を見ていた参加者は動搖を隠しきれていない。その集まる視線に慣れっこな少年……いや少女は気にする様子もなく動作の確認をして いた。

「まだかな」

持参したヘアゴムで髪を縛り開始の合図を待つて いると門が開き数秒後に既に始まっているとアナウンスが入る。

「じゃあ行きますか！」

少女はその見た目に合わぬ速度で他の参加者に並び門を潜つていく。

「おつ1Pみつけ」

早速仮想ヴィランを見つけた少女はその脚力で取り敢えず蹴りを入れて みる。思つたより脆いのか胴体を碎かれて機能停止する。

「これで1Pつて事でいいんだよね。今日は脚力だけで大丈夫そ うか

な？」

トントンつま先を叩きながら足の調子を確かめる。特に痛みも無いから問題ないと認識する。

「じゃあガンガン行きますかー」

そうして少女はサーチアンドデストロイを繰り返していると崩れた瓦礫に足を挟まれている参加者を見つける。

「そい！」

瓦礫を蹴り飛ばしてケガを負っている参加者に手を差し伸べる。

「大丈夫？」

「ああ助かつた。それよりアンタ試験は？」

「怪我人ほっぽいてちや駄目でしょ」

立とうとしない参加者の足の様子を確認して痛そうな傷口を見て仕方ないと手を取り。自分の個性の指定先を変更する。

「目を瞑つといて。良いと言うまで開けない事」

「あ……ああ分かつた」

「体に少し変化があるけど気にしないでね」

自身の個性を発動する。参加者の性別が変わるが気にする事なく手を取り続けると怪我をしていた足がみるみる治っていく。

変えてから20秒程で完治したかな?と思った所で手を離すと参加者の性別が元に戻る。

「どう?動けそう?」

「ああ大丈夫だ。ありがとう」

「気しないで。じゃ」

動ける事を確認した少女は再度仮想ヴィラン狩りにひた走る。その少女の背中はまさしくヒーローであったとその参加者は言う。

そして残り2分と言った所だろうか。0Pである超巨大仮想ヴィランが投入される。

「あーありや無理だね」

自分の力は理解している少女は逃げの一択と思つたが道すがらにまたも瓦礫に足を取られている参加者を発見。とりあえず瓦礫を蹴り飛ばして参加者に立てるかと尋ねようと思つた瞬間。

## 「すつごいジャンプ」

一人の少年が飛び出す。そして少年は腕を振りぬき超大型仮想ヴィランを一撃で粉砕する。

「あれ腕と足ボロボロだけど大丈夫?」

着地の姿勢を取れるとは思えない。すると先程まで瓦礫に足を取られていた参加者が少年の下まで運ぶようにお願ひされる。

指示通り運ぶと瓦礫と一緒に浮き上がり着地の寸前で少年に触れて浮かせる。そして少年を受け止めて解除する。

「うつ……」

参加者が吐く。そして受け止めた少女は少年が動ける状態でない事を察していた。

「せめて……1Pだけでも」

「無理は駄目」

周りを見ても既に壊されている仮想ヴィランの山。とてもじやないが間に合わないだろう。

少年を地面に優しく降ろして怪我の酷さを確認。

「残り1分半……治しきれるか?」

大丈夫な方の手を取り自身の個性を発動。性別と見た目が変わつていく事に困惑する少年であるが安静にと言い聞かせて個性を持続。「足は治つたけど……腕は無理か」

無情のタイムアップ宣告。そのショックに気絶してしまう少年。

「……」のまま治療続けるな

その後にリカバリーガールと呼ばれる凄いお方が来て瞬く間に腕を完治させてしまう。

こうして少女の試験は終了する。

「戻れは……しないよね」

自身に対する個性解除の合図の手の平を合わせる動作をするが解除はされず少女のままであつた。

「あの少年に力使いすぎたからかな」

仕方ないと受験会場を後にする。元の姿の時に着ていた男子制服を着て。

後日、教師になる平和の象徴オールマイトの映像と共に合格通知が届くのであつた。

少年の名は天環セイ 個性：性転換

## 体力測定らしいつすよ

天環が指定されたクラスのA組に入るとそこには何やら言い争っている2人がいた。

「おはよう。どしたの朝から」

憶することなく首を突っ込む辺り遠慮無しだなと見ていたクラスメイトが思っていた。

「うつせークソモブ話しかけんな」

「ああおはよう。俺は飯田天哉だよろしく頼む」

「飯田君ねこちらこそよろしく。あつ名前は天環セイ好きに呼んで」

「では天環くんと呼ばせて貰う」

「あいよ。それでそつちは?」

不良にしか見えない態度が悪いクラスメイト爆豪から自己紹介はされずに飯田からの紹介で名前を知る。

そして一旦2人から離れて別のクラスメイトと交流を行う。

「デクくんあの人いないね」

「麗日さんあの人って?」

「ほら入試の時に助けてくれた女子。別のクラスかな」

「何の話?」

「あ、うん入試の時にねつて君は?」

天環は入試の時に見掛けた2人に話しかけるが当の2人は気付かない。

その後に各々自己紹介を行い担任の先生が入つて来て話を切り上げるのであった。

「入学初日から個性込みの体力測定か」

各々体操服に着替えて現在グラウンド。爆豪の記録を見て芦戸が面白そうと言うが担任の相澤が最下位を除籍処分すると脅す。

「マジですか……マジですね」

あの目は本気である。天環含めクラスメイトはその事を瞬時に察する。天環は自身の両手を合わせて個性を発動する。

「よしつと……ん？」

天環の大きい変化に初めて見た人達は口を開けたままだ。一部を除いて。そして一番大きな反応を示したのは緑谷と麗日であった。

「あー！君あの時の！」

「えっ!? 女子になつた？ 女子に戻つた？ どっち？」

「おいおい美少女になれるとか最高かよあの個性！」

興奮気味の峰田を無視して2人に向き直り説明を行う。

「入試の時はどうもだね。緑谷君と麗日さん。一応女性になつたって言うのが正しいかな」

「あつそつなんだ……あの時はありがとうね！ 脚治してくれて」

「私も助けてくれてありがとう」

「気にしないで」

何でもない様に笑う天環。その反応を見て相澤は思考を巡らせる。  
(あがれが今年のレスキューPトップ。事前提出の個性欄には「性転換」と書かれていたが入試を見る限り別の事もこなせるらしいな)

今年は粒ぞろいだと密かに期待が高まる相澤であった。

そして始まる体力測定。天環の記録はと言えば増強系の個性が無い人よりも良いが純粹な増強系とか特化型には勝てないという結果である。

「八百万さん万能すぎません？」

「スクーターとか万力とか大砲とかアリですか？」

「アリだ！」

有りらしい。担任が言うなら仕方ない。そして緑谷のソフトボーリ投げの時に相澤が個性を消して自滅覚悟の記録は駄目だと注意を行う。

指1本のみの増強(犠牲)で記録を叩き出し動ける事を示した緑谷。

「相澤先生、緑谷君このままでですか？」

「後でリカバリーガールに見てもらうから気にするな」

「今治さんいんですか……じゃあ勝手に。緑谷君こつちに」

緑谷を手招きして指先の状態を確認。

「これなら大丈夫そうかな……ちよつと目を閉じてて」

「あつうん」

緑谷の手に触り個性を発動。緑谷の体の変化にクラスメイトが再度驚くがそれ以上に40秒程の変化の間に完治する先程までボロボロだった指。

「はい終わりどう？動く？」

「ありがとう天環くん？さん？」

「好きに呼んでいいよ」

女子になつた天環に触られてか顔が赤い緑谷。その一部始終を見ていた相澤は尋ねる。

「天環お前の個性で他者を伸ばせるのは治癒能力だけか？」

「いえ脚力他色々上げられますよ」

「……緑谷少し協力して貰う」

そうして再度行われるソフトボール投げ。どちらの記録になる訳では無いがやつてみろと言う。

「天環今の大値でやつてみろ。許可する」

「はい。緑谷君いいかな？」

「う……うん」

投げない方の手を触り個性を発動。体が女性になる緑谷が滅茶苦茶戸惑う。一部男子と女子が女緑谷を見ておおー！となつていて。

「分かつていただけど恥ずかしいねコレ」

「気にしたら負けだから。少し負担大きいけど頑張って」

天環が施す強化は腕力。そして緑谷が思い切りぶん投げる。出た記録にクラスメイトが驚く。ちなみに手は記録が出たと同時に放している。

記録：612.5m

天環の記録150mの3倍以上である。これを見た相澤は不信に思つたのか問い合わせる。

「天環お前手を抜いていたつて訳じやないよな？」

「いえ全然。あれが今出せる自分の本気ですよ」

「じゃあ何で緑谷の方が記録が伸びる」

「個性の性質上仕方ないんですよ」

天環は自身の個性の細かい説明を行いそれを聞いた相澤は納得はしていた。

「つまり他者への使用がメインだと」

「許可さえ貰えれば」

天環は……気にしてない訳ではないが個性である以上割り切つている男女の性差。それを受け入れるのは相手次第だ。

「例えば爆豪君とか切島君とか自分が女子になつたら嫌でしょ？」

「ああ？」

「確かに……」

強化だけだつたら回復も出来るし重宝される個性であつただろう。だが性転換のついでに行われるとなると話は別だ。

「緑谷君も何度もごめんね」

「い、いやつ助けてくれたついでだし気にしてないよ」

「でも多用されるのも困るでしょ？」

「それは……まあ」

緊急時以外は他者への使用を強要出来ない。それが天環の個性だ。

「オイラはいつでもウエルカムだぜ！」

「じゃあやつてみる？」

峰田がなりたいと拳手する。天環が手を取り個性を発動する。

「あれ？ 緑谷程見た目変わんねえな。てか変わつてない」

「見た目の変化も人それぞれだからね」

「でも女の体である事には変わりないはず！ ぐへへへへ！」

そして自分の胸を触りだす峰田。だが少し触つてから。

「虚しい」

「だろうね」

見た目に変化が無いため楽しくも何ともない。虚しさだけが残る。

「クソッ！」うなつたらセイの胸を！」

「そい！」

飛び上がる前に投げ飛ばされる峰田。

「男に触られるのはノーサンキュー」

女子達が峰田を汚物を見る目でみていた。忘れがちだが入学初日

である。

そして全ての記録が終わり総合成績が発表される。天環は21人中で10位と真ん中の成績に終わった。  
ちなみに除籍処分は嘘だつたらしい。

「個性の解除……は出来ないなあ」

更衣室に戻る前に解除を試みるが出来ずにいた。解除までのラグがあるためだ。

「まあいいや入ろつと」

躊躇いなく男子更衣室へと入るが、入った瞬間に皆固まる。一番最初に反応を示したのは飯田であった。

「天環くん！君個性の解除は!?」

「出来なかつた。少しラグつてる」

天環は自分のロッカーを開けて体操服に手を掛けようとするが止められる。

「待てせめて俺たちが着替え終わつて出てから着替えるべきだ」

「飯田ー邪魔すんなー」

「そーだそーだ」

峰田と上鳴が抗議するも飯田は聞く耳持たず。仕方なしと溜息と共に天環は自分の荷物を取り更衣室を出る。

「教室で着替える」

戻れない時に別の場所で着替えるのは天環にとつては慣れっこであつた。性差とはそういう物である。

## 戦闘訓練ですつてよ奥さん

入学初日の夜、緑谷は昔の夢を見ていた。

個性が無いと言う現実を受け入れられずに居た幼少の頃、周りの子達が次々と個性を発現させる中必死に個性が出ないかと足搔いていた。

どうやつても何も個性が出ないと泣いてた時に出会ったのは少女のような少年のような不思議な同年代の子供。

「どうして泣いてるの？」

「僕ね……僕ね……」

聞いてくる子供に個性が無いという現実を話してしまう。それを聞いた子供は笑いながらも緑谷の手を取る。

「今は個性が無いかもしないね。でもね世の中には誰かに力を与える個性もあるんだ」

「えっ……」

手を取りその子供は個性を使つたのだろう。すると緑谷は今まで出したことの無い力で拳や足を振るえていた。

「すごい！」

「ふふつ……だからさ諦めないで？諦めなければ夢は叶うよ」

一度だけ会つたその子の言葉に随分と励まされた。もう曖昧な思い出。

そこまで見て緑谷の目は覚める。

「懐かしいな……あの子今はどこに居るんだろ」

あれから自分は憧れていたヒーローに力を……個性を貰つた。今はまだ借り物だけどいつか扱える様になつてお礼を言いたい。緑谷はそう思いながら朝の支度をする。

雄英のヒーロー科のカリキュラムにヒーロー活動を実技で経験するヒーロー基礎学という物がある。

事前に提出した書類にはヒーローコスチューム案という物があり業者が各々の要望に合わせてコスチュームを作ってくれる。

各自の個性に合ったコスチュームを着ている中天環はと言えば。

「地味だつたかな」

青の男物の拳法服に大きさ自在の拳と脚のプロテクターであつた。

「どういう案出したんだ?」

「動きやすい事と女性が着てても違和感が無い事と手と足の保護」

「なるほどなあ……」

歯車を意識していると思われる切島の男らしい衣装や見るからに危ない奴である爆豪なんかと比べると地味だと天環は思ってしまう。「天環くんは下手に肌を晒す訳には行かないだろうから仕方ない」

「ありがとう飯田君。衣装カッコいいね」

コスチュームに関して意見を言い合っているとヒーロー基礎学担当のオールマイトが来る。授業説明の後にチーム決めが行われる。「1人余りましたけどどうします?」

余つたのは轟であつたがオールマイトは問題無いと判断する。轟も轟で構わないと述べる。最後に誰かと戦つて貰うという。

「じゃあ第1チーム配置に着いたか?」

第1チームはヒーローサイドが緑谷と麗日でヴィランサイドが爆豪と天環であつた。

「よろしくね爆豪君」

「うつせークソモブ」

ぶつきらぼうな態度の爆豪に苦笑いの天環。そして上の階に設置した核弾頭の模型の前で開始の合図が告げられる。

「クソモブはそこから動くんじやねえ!」

「あーちよつと!」

独断先行で勝手に行動する爆豪。静止も聞かずに飛び出した彼に困り顔の天環であるが仕方ないと個性を発動して模型の前に待機する。

「聴力強化でいいか」

下の階がどつたんばつたん大騒ぎである為強化倍率を調節してこの階の音が聞こえるレベルにだけ強化を施す。

「……」

コツコツと少しずつ近づいてくる1人分の足音。動く事無く様子見を決める。

部屋を1つ1つ確認しながらも確実に近づく。そして顔をこつそりと出す麗日であつたが天環が音の感知を止める。

「……」

気づかれていないと思つてゐる麗日に対して天環も脚力強化で奇襲を行う。2歩で部屋を出て麗日と接敵。

「スニーキングはもう少し慎重にね？」

「あうっ！」

高い機動力で後ろを取られて腕を押されて倒される。動こうとするも腕力の強化で完全に封じられている。

「爆豪君こつち抑えた。後はそつちだけ」

一応配布されたインカムで爆豪に報告を行ふが聞いてゐるか怪しいと思つてしまふ。

…………

そして緑谷が個性を抑えた力で殴りつけるも直ぐに戻つた爆豪にマウントを取られて結果ヴィランサイドの勝利に終わる。

「今回のMVPは天環少……年？だ。最低限の動きで相手を捕らえる動きは見事。麗日女史も接敵の際に焦つてはいけないよ」

緑谷も動きは悪くない。そして爆豪は周囲に氣を使つて戦う事を言い渡された。

そして次々と訓練が進み最後に轟と誰かの試合になる。

「爆豪少年リベンジしてみるかい？」

「ああ！上等だ！」

緑谷に何か挑発されたのかイライラが貯まつてゐる爆豪。

「天環少年もいいかい？」

「構いませんよ」

個性を解除して男性に戻つてゐる天環に大丈夫か尋ねる。個性を発動し女性になる。

「足を引つ張んじやねーぞ」

「気を付けますよつと」

再度爆豪チームがヴィランで配置に着く。そして試合開始の宣言直後に轟が個性を発動させる。

「あの野郎!!」

「うわー遠慮が無い」

ビルの中が一瞬で凍らされる。爆豪の爆破により天環は凍らされずに済むが模型が凍らされている。

「あちやーこれじや動かせないね」

「そこで待つてろ！」

「いや一緒に行くよ。多分ここに残つても意味無いし」

同じ様に先行しようとする爆豪に同行しようとする天環。爆豪がやられたら再度ビルを凍らせてゲームエンドである。それだけは避けなければならなかつた。

「音で索敵はするから」

「……勝手にしろ」

そうして爆豪も徒步での散策となる。探し始めて2分段々と轟の足音が近づく。

（曲がり角の階段から足音。あと15秒ほどで接敵）

インカムで情報を送る。それを聞いた爆豪が奇襲の準備を済ませる。

天環の宣言通り15秒後に邂逅し爆豪と轟の戦闘が始まる。

轟が出す氷を爆豪が最低限の爆破で碎いて行く。そして一気に近づき氷が出ない方を掴み投げ飛ばす。

「こんな戦闘に介入なんて無理だなあ」

天環は寒い廊下の中遠い目で爆豪の勝ちを祈っていた。この状況で出て行つても微妙だろう。凍らされて足手まといがオチである。

「あつ後ろ向いてるや」

爆豪と轟の入れ替わり立ち代わりの戦闘で轟が天環に背を向ける形になつた。

「距離にして4歩……次の爆発で……！」

足音を消し去る爆音を合図に天環は脚力強化で氷を踏み抜き赤髪側に距離を詰めて跳躍後に肩にかかと落としを決める。前のめりに倒れた所で踏みつけ右腕を極める。

「つぐあ！ 天環テメエ」

「おいクソモブ邪魔すんじやねえ！」

「何で恨まれてんの!? いや轟君確保ー！」

『ヴィランチームの勝利』

爆豪と轟共に消化不良で訓練が終了する。

「何で邪魔したア!?」

「だつてさーあのままだとどつちかが倒れるまでやつたでしょ？ 訓練として合理性に欠けると思う」

天環としての本音は寒いしさつさと終わらせて欲しかったという物であるが言わない。そして納得できないといった顔の爆豪。

「チーム戦だつたつて言うのが運の尽きだと思つて。そのうちサシで戦う機会もあるでしょ」

天環がそれだけ言つて一方的に会話を切る。お互い言い合つても無駄だと分かつているのだ。

オールマイトと行う総評で爆豪の周りへの配慮をした戦い方を褒めていたし轟の核確保方法も褒めていた。

「それと天環少……いや女史と言おうか。大きく動くスタイルなら胸に気を使つた方が良いだろう。コスチューム班にもそう伝えておく」

それだけ言つて総評は終わりであった。

## 林間合宿ですよ

個性強化を兼ねた林間合宿。各々個性の強化に励む中天環は緑谷達と共に、格闘戦を行いながらの強化倍率上げを図っていた。

「うーむ……動きは見れるけど経験差と体格差で捌かれる。カウンターも狙えない」

器用な足技と動体視力の強化を使つたカウンターを駆使し戦う天環にとつて、体がぐにやぐにやで自由自在に軸をずらして攻撃を捌く虎さんは相性が悪かつた。

短時間に最高倍率を掛け続けた結果、2日目の夕時。女性姿から戻れないまま自分たちのご飯を作り、食べ終えた所であつた。

「それで……何故女子風呂に放り込まれて居るのだろうか」

天環を前に何の恥じらいも無く脱いでいく女子達を前に、頭を抱えながらも尋ねる。

「えー？ セイちゃん今女子だから問題無いでしょー！」

「むしろその姿で男子風呂はダメでしょ」

「チアの時は逃げられましたからね」

「そのおもちで男子は無理だよ！」

下着も取つ払いバスタオル一枚芦戸と葉隠がジリジリと近づいてくる。

「さあさあ基本男子姿故に交流が無い女セイちゃんと裸のお付き合いを」

「さつさと脱げー！ その溢れるおもちを晒すのだー！」

「……嫌なんだけどなあ」

脱がされる前に後ろを向きそそくさと脱ぎ始める。最近少しきつくなつて来たブラも外し、先にバスタオルを卷いて下を脱ぐ。

「流石に手馴れてるね……彼女とか出来たらあつちゅー間に脱がしそう」

「そもそも天環さんが作るのは彼氏と彼女どちらなのでしょうか？」  
「好きになつたらどつちでもいいよ。どつちにもなれるし、どつちにも出来るし」

男前な発言をしつつも足並み揃えてお風呂に向かう……の前に。

「うわーセイちゃんやっぱりデカい……そして柔らかい！」

「あのー離して貰えると助かるのですが」

芦戸から抱き着かれて過剰なスキンシップの洗礼を受けた。苦笑  
いながらも、やんわりと静止を呼びかける。

「照れて……無いわね。てか天環アンタの体ってか性別って本来どつ  
ちなの？」

「あーそれ気になつてた」

「別に……んつ……どっちでもいい……あつ……でしょ？まあ……ご  
想像に……いやつ！……お任せするから……イツ……!!」

「こう見ると完全に女性ですわね」

弱い部分を責められてへたり込んでいる天環を見ながらも呟く八  
百万。皆うんうんと顔を合わせ頷いていた。

「まあ……実際は男だつたんですけどね。アウエー感ハンパないです  
よ」

ボソット呟く声を聴きとれたのは耳郎のみで、一瞬天環の体を見て  
「くつ……！」と悔しそうだったのはここだけの話であつた。

## 突撃隣の浴場ですつてよ

天環の事を根掘り葉掘り聞こうとする女子風呂の方、男子風呂は約1人が件の天環について愚痴つていた。

「ずりーよな天環！一人だけ女子風呂つて……！俺も女にして貰えれば女子風呂に……！」

「無いだろ。むしろアイツが特殊すぎんだよ」

「前にクラス会でも話し合つたが『男性の時は男子として、女性の時は女子として扱う』で決まつただろう」

天環が性別フリーである故にどつちで扱うかを最初の頃の話し合いで決めてしまつたのだ。

無論女性と男性どつちへの理解もある天環にのみだけ適用されている。

例えば女になつた緑谷は男扱いだし、男になつた芦戸なんかは普通に女子扱いである。  
〔雄英……いや共学ヒーロー科は女子比率低いから女子連中も仲間増やしたいんだろうな〕

「でもよう……アソツ授業はほとんど男子だぜ……？」

「背の関係で男子の方がマシという理由らしい。前が飯田だからな無理も無い」

雑に決められた席順で、背の高い飯田が前に居るせいで黒板が見えないため、高さを稼ぐために男子で過ごす事が多い。

「あと峰田の視線が鬱陶しいらしい」

「あーそりや男ですごすわ」

「ちなみに普段が男子だから唐突に女子の方へ突っ込まれるのは苦手らしいよ?」

「何で緑谷はンな事まで知つてんだよ」

意外と天環の事情に詳しいのが緑谷だ。

「いやー個性の制御の特訓を手伝つて貰つてる間に色々話す事もあるから」

「ほーん」

「アイツもフランクでお人好しだからなー……でも男同士手を繋いで個性制御特訓つて絵面嫌じやね？」

「あつ……いやー特訓中は倍率高くしてくれる関係で……」「ずっと女子の天環と特訓を……？」

「いやー！特訓中は僕も女子になってるから！決してそんな関係になる訳じゃ！」

言い訳を垂れ流す緑谷だが、放課後ずっと女子と手を繋ぐ事には変わりは無いのである。

その上、女性の天環は男子から見てもレベルは高い。そんな女子と楽しくおしゃべりである。

『緑谷ギルティ』

「ええっ!?」

「ちなみに緑谷アイツの好みとか聞いてんの？」

「聞く訳ないから!?それに……つてあれ峰田君何やつてるの？」

ふと視線をずらすと女子風呂の仕切りに向かっている峰田。不審に思いながら眺めているとブツブツ言いながら……

「待つてろよ桃源郷おおおお!!!」

個性を使つて仕切りを登り始めた。周りの男子が慌てて止めようとするも、無駄に素早く動き仕切りの頂点に到達したと思つた瞬間に、浩太に阻止されて叩き落とされた。

浩太は向こう側からの声に振り向くと、鼻血を噴き出してバランスを崩してしまった。

「危ない！」

緑谷ともう一つの声が女子風呂から聞こえてきた。子供がこちら側に倒れそうになると同時に仕切りの上から誰かが飛び出してくる。

「つたあ……着地地点ミスつた……けどセー……フ？」

突然の乱入者に男子たちは注目を集める……集めてしまう。

「?……あつ」

乱入者である女性姿の天環は、自分の状況を見る。

浩太を抱えて壁に激突しそうになり体を捻った結果、男子達に正面を向いて尻もちをついた格好で足もM字に広がっている。

さらに言えば先程まで風呂に浸かっていたため、髪も纏めていてタオルも頭にあり体に巻いていない。つまり……

素つ裸であつた。

女子として見られてはいけない部分は全部見えてしまつてている状況である。胸は辛うじて浩太で見えづらい形ではあるが。

「あー……あはは……まあセーフでしょ」

「アウトだバカ!!」

爆豪の一言で皆一斉に目を逸らす……一人を除いて。

「お、女の……女子のおっぱ……おっぱ……おま……ゴフウ！」

「み、峰田くーん!」

「我が生涯に……一片の悔い無し……!!」

峰田、唐突な情報量の多さにより鼻血に沈む。その顔はとても晴れやかであった。

「……………じゃあ出久君。あとは頼んだ！」

目の前のカオスから脱出したいためか、浩太をその場に置き立ち上がり駆け出そうとするも。

「あいたつ……腰が地味に痛い」

立ち上がりてすら居なかつた。そして浩太を置いたため、正真正銘裸を晒していたのであつた。

「いい加減前くらい隠せバカが！」

近づいて来た爆豪が天環の頭のタオルを取り、前が隠れるように押し付ける。慌ててタオルで胸元を抑えていた。

「あはは……ごめんね」

「いいからさつさと向こう行け」

「ごめんねーとだけ言い残して扉の方に向かいそそくさと出ていく天環。ちなみにその表情には照れや恥じらいは欠片も無かつた。

「……」

「やっぱアイツは女性の時は女子でいいだろ」

『……そうだな』

天環が嵐の様に去つた後の切島のその一言に男子達は頷いていた。